

シンポジウム 会員講演 2

意識の難問を解く逆生理光学、超難問を解く輪廻転生

Solve the hard problem by the "reverse physiological optics",
solve the harder problem by "samsara"

渡辺 恒夫 (東邦大学)

WATANABE, Tsuneo (Toho University)

はじめに

筆者の専門は心理学であるが、物質科学で発達した近代科学の方法だけでは「心」へ接近するのは不可能と考え、心の科学の哲学的前提を批判すべく「心理学の哲学」を提唱し、科学哲学者と共同研究をしている。「脳からいかにしてクオリア世界、もしくは主観的な意識が生じるのか」という、「意識の難問 hard problem of consciousness」(チャルマーズ[1])もまた、哲学的前提へ遡っての批判が必要となる問題の典型というべきである。

石川氏の講演でも言及されているように、意識の難問をめぐるには、ペンローズら理論物理学者たちを中心として様々な量子脳理論が提唱されているが、難しい問題には難しい(技術的に高度だが無理の多い)理論を構築して当たるというのが自然科学者の通弊らしい、という感想を筆者はかねがね抱いている。「通弊」というのは、いくら難解高度な理論を構築しても、最初から道をまちがえていては目的地から遠ざかるばかりだからだ。必要なことはいたずらに健脚を鍛えて遠くをめざすことではなく、元々の分かれ道に引き返すことではないのか。分かれ道に立っていた道標は、一方が「客観性」、他方が「主観性」と読めたのだった。ガリレイ以来の近代科学は「客観性」への道を選び、主観的なものすなわち、公共的観測にかからない「私」の意識経験、一人称的経験を排除することによってこそ、成功裏に科学的世界像を構築しえたのだった。それを今頃になって「いかにして主観的な経験を説明するか」に頭を悩ますのは、完全密閉式の家を建てておいて窒息しかけ、いかにして内部で空気を作り出すかの研究に着手するのと等しい。分かれ道に戻って「主観性」への道を辿り直してみることを、一人称的認識論の構築と呼ぼう。

標準的な認識論と生理光学における人称的視点の混乱

そもそも、「意識」とは常に「誰かの」意識なのである。この明晰判明な事実を忘れるや否や、意識科学はたちまち人称的視点に混乱をきたし、背理に陥ってしまう。たとえば、「赤い薔薇が見える」という視覚経験を説明するのに、標準的な認識論と生理光学では、「外部世界から来た波長 700nm の光のパターンが網膜の感覚細胞を刺激して電気パルスに変換されてニューロンによって大脳皮質に伝えられ、赤い薔薇という知覚像が成立する」というタイプの説明をする。ここでは「大脳皮質」までは三人称的視点で語られ、「知覚像」で突然、一人称的視点に切り替わっている。そして「意識の難問」が起こる、というわけだ[3]。

三人称的視点で一貫させるなら、知覚像など持ち出さずに、「運動皮質から運動神経へと

興奮が下降し、「赤い薔薇を見た」という言語反応が生じる」と、やればよいのに。

一人称的認識論は逆生理光学である

他者の意識は観測できないがゆえに、私の意識から出発し、一人称的視点を徹底させよう。図1 (OHP-1) は、ギブソンの『生態学的視覚論』にある「自画像」[4]である。これを参考にしながら自分自身の視覚世界を観察しよう。私は水晶体や網膜や視神経を通して外界を見ているのに、それら視覚器官は「見えない」。私は、「健常であってそれゆえ透明」な視覚器官を通して外界をいわば、「照らし出している」というのが、素朴な印象、素朴実在論的な直観だろう。クオリアなき客観世界から光が目飛び込んで、脳でなぜかクオリアが作られる、などと持って回った説明をする必要はない。私が、認識の光を放射して視覚器官を「透視」し、外界をサーチライトのように照らし出してクオリアを「発見」する、というのが、「私が見る」ということなのだ。ギブソンは、意味は脳が作り出すのではなく、環境世界に先在するという。世界は元々クオリアに満ち、認識の光がその一部を発見するのである。なるほど、私が見る北極星の姿は、1000年前のものだ。その意は、私は、認識の光を物理学的な光に時間逆行して送り出し、1000年過去の北極星へと到達させるということなのだ。中世の認識論では、目に光が入って物が見えるのではなく、目から光が出て物が見える、という説明が主流だったという。かかる「逆生理光学」は、決して既存の物理学体系と相矛盾するものではない。ただ、「私」のいる場面で、方程式の時間の向きを逆転させればよいだけなのだから。

逆生理光学の導入によって、意識の難問はある意味で解決される。「ある意味で」というのは、別の難問が姿を現すからだ。それを、「意識の超難問 *harder problem of consciousness*」と呼ぶ。意識の難問が、物質と精神の関係についての問題であるのに対して、意識の超難問は、自己と他者の関係についての問題である。

独我論的な世界

一人称的認識論が多くの人々を納得させないとするならば、それが独我論的な世界をもたらすからだろう。「目から光が出て物が見える」という説を聞いたからといって、他人の脳の中に「光源」を捜し回るようなバカなことをしてはいけない。一人称的認識論を無矛盾的に貫徹するならば、意識とは常に「私の意識」であり、「他者の意識」とは「円い四角」のように思考不能な観念であり、したがって私が宇宙の中心である、と考えることになるのだ。事実、図1でギブソンの描いた視覚的宇宙の座標原点は「私」であった。このような独我論的世界観には、感情的に反発するところがあるだろう。この感情的反発の、心理一論理的な源を探ってみよう。

そもそも、「私」とは誰のことか？ 渡辺恒夫のことだ。渡辺恒夫は、今朝、満員電車に揺られてきた。大勢の人々の中の目立たない一人として。駅ビルを通り抜ける際、大きな鏡に、群集にまじってホームレス風の男の姿が映った。その瞬間、渡辺恒夫(=私)は、心の中で叫んでいた……なぜだ！？いかなる理由があつてこのみずぼらしい一人の地球人に

宇宙の座標原点が位置しているのだ！？こんな世界はいびつだ。エレガントでない！
かくして、意識の超難問が出現する。

意識の超難問

意識の超難問とは、「地球上の何十億という人間たちの中で、なぜ他の人間でなくこの人間がたまたま<私>なのか？」という問いである。この問いは、イギリスの哲学者ネーゲル[5]によって定式化され、ロバーツや筆者[6]によって意識科学国際会議で提起された。

この問いは、一見、独我論なしでも成立するように思える。けれども独我論ぬきの超難問は、「私という魂が他の人間でなくこの人間に入ったのはなぜか？」といった、二元論を前提とした問いと間違われやすい。超難問における<私>とは、「諸々の私たちの中の一つの私」ではなく、宇宙に類例のない、唯一絶対の<私>なのである。つまり、宇宙の座標原点としての私なのである。それゆえ独我論的世界像の中に置かれてこそ、超難問の意味は鮮明となる。「地球上の何十億という人間たちの中で、なぜ他の人間でなくこの人間がたまたま<宇宙の座標原点>なのか？」[7]

エレガンスの原理から輪廻転生へ

宇宙の座標原点が、今、このシンポジウムで訳の分からない事をしゃべっているホームレス風 50 代♂ (=渡辺恒夫) に位置しているという世界像が受け入れがたいとすれば、もっとエレガントな世界像を捜し求めなければならない。

①化身教義

第1案は、<私> (以下宇宙の座標原点の意味で用いる) が渡辺恒夫であるのは、隠れた理由によって必然である、と考えることである。たとえば私は本当は宇宙の唯一神であって、何か思い出せない理由があって渡辺恒夫という平凡な地球人として生まれたのかもしれない。これは、キリスト教、特にヨハネ福音書にみられる化身教義とよく似ている。

②独我転生輪廻

2案は、<私>が渡辺恒夫であるのは全くの偶然である、と想定することだ。すると、偶然とは何度も起こるものだから、<私>が誰か任意の地球人 (もしくは宇宙のどこかの知的生命体) であるという事態は、これまでも何度か起こったし、これからも何度か起こる確率が高い、ということになる。これは、一種の輪廻転生観だ。ただし、独我論的な<私>だけが転生輪廻するのだから、独我転生輪廻とでも呼べる。また、この輪廻転生観は、記憶の継承その他のいかなる経験的証拠もなしに、成り立つのでなければならない。

③刹那転生輪廻

②案を前提としても、「<私>が誰か任意の人間であるという事態」の時間的最小単位は、果たして人の生物学的一生と一致するだろうか。私は渡辺恒夫として熟睡している間、誰か他の知的生命体に「転生」しているのかもしれない。あるいは私は、熟睡から覚めるたびに、他の知的生命体へと転生を繰り返してきたのかもしれない (=毎日転生観)。こうしてみると、生物学的一生だの一日だのといった偶然的で曖昧な単位よりも、何か時間に基

本的で本質的な単位（時間原子）があって、時間原子ごとに私は転生輪廻する、とした方が、よりエレガントに感じられる。この時間原子を、仏教哲学に習って刹那（ksana）とよび、刹那ごとの転生輪廻を刹那転生輪廻説、もしくは簡単に刹那転生観とよぶことにする。図2（OHP-2）は、そのような世界像を図解したものである。大乘仏教では、世界そのものが刹那にして滅しては生じるといふ、「刹那滅」の説を取る[8]。この、刹那生滅する仏教的宇宙像においてみると、刹那転生観は極めて収まりがよい。私（白抜きの小円）は一刹那ごとに転生することによって、1秒間に世界の全ての人間（小円で表示）となる。

刹那転生観では、独我転生観でやや回復しかけた世界のエレガンス性が、ほぼ完全に回復する。全ての他人は、数刹那過去か未来の<私>なのだ。私が渡辺恒夫としての連続した記憶を持っているかのように感じている、という事実も、不連続的な映画の動きが連続して感じられるという、ストロボスコープの原理で説明できるかもしれない[9]。

おわりに

刹那転生輪廻は、最もエレガントな解とはいえない。よりエレガントな解としての様々な転生輪廻説が展開しうる。たとえば、時間非实在説に立ち、転生の時間的順序が全くランダムだと想定して結果的に同時代のあらゆる他人に転生しうるとした、遍在転生観（図3、OHP-3）、刹那転生と遍在転生を組み合わせた刹那・遍在・転生観、さらには、任意の他者への転生の確率は100%未満であるとした、「穴だらけ遍在転生観」（図4、OHP-4）。なお、これらについては、他の所に詳しく書いたので[10]、ここでは省略する。

今までの議論が、超心理学にどのような関係があるのだろうか、疑問に思うかもしれない。けれども、出発点や考え方それ自体が間違っているのは、どんなハイテクで装備して巧妙な実験を積み重ねても、どんな難解精密な理論をもってきても、徒勞に終るだろう。筆者は、正しい考え方の道筋を示し、論理的に可能な世界像を呈示したまでのことである。超心理学の営みがそれによって影響を受けるのか受けないのかは、今のところ分からない。

文 献

- [1] Chalmers, D.: Facing up to the problem of consciousness. In S.R. Hameroff, A.W. Kaszniak, & A.C. Scott (Eds.), *Toward a Science of Consciousness: The First Tucson Discussions and Debates* (Pp.5-28). MIT Press, 1994.
- [2] 脳イメージングで自分の脳皮質活動を「観測」と想定しても、自分の脳と知覚像の因果関係を観測によって確かめたことはならない。拙稿「認知科学の理論的諸問題(I): 心脳問題の一人称的思考実験」(東邦大学教養紀要、31: 11-20,1999)での議論を参照のこと。
- [3] 詳しい議論は、『オカルト流行の深層社会心理: 科学文明の中の生と死』(渡辺恒夫、中村雅彦共著、ナカニシヤ出版、1998)のp192-212を参照のこと。
- [4] ギブソン『生態学的視覚論』(古崎敬他訳、サイエンス社、1985)、p122.
- [5] Nagel, Th.: The Objective Self”, In C.Ginet, S, Shoemaker (Eds), *Mind and Knowledge*,

Oxford, U.P. , 1983; Nagel, Th. : *The View from Nowhere*. Oxford U. P. , 1986.

- [6] Roberts, T.S.: Beyond the hard problem. *Consciousness Research Abstracts: Toward a science of consciousness--Tucson 3rd*, p69, 1998; Watanabe, T.: Psychological and philosophical considerations of the harder problem of consciousness. *Poster presentation at "Toward a Science of Consciousness—Fundamental Approaches: Tokyo '99"*, 1999.
- [7] なお、意識の超難問が真に有意味な問題であるか否かには、異論も多い。異論の例として、「意識の超難問」の論理分析（三浦俊彦、科学哲学 35(2) : 69-81, 2002）をあげておく。また、三浦氏と筆者の、超難問の有意味性および輪廻転生をめぐる論争の全てが、次のサイトに掲載されている。⇒<http://homepage1.nifty.com/t-watanabe/correspondence.htm>
- [8] 谷貞志『無常の哲学：ダルマキールティと刹那滅』春秋社, 1999.
- [9] 刹那転生観とストロボスコープの原理のアイデアは、論理学者 R. スマリヤンの『哲学ファンタジー』（高橋昌一郎訳、丸善, 1995）にも語られている。
- [10] 拙著の、『輪廻転生を考える』（講談社現代新書、1996）と『<私>の死の謎：世界観の心理学で独我を超える』（ナカニシヤ出版、2002）を参照のこと。